

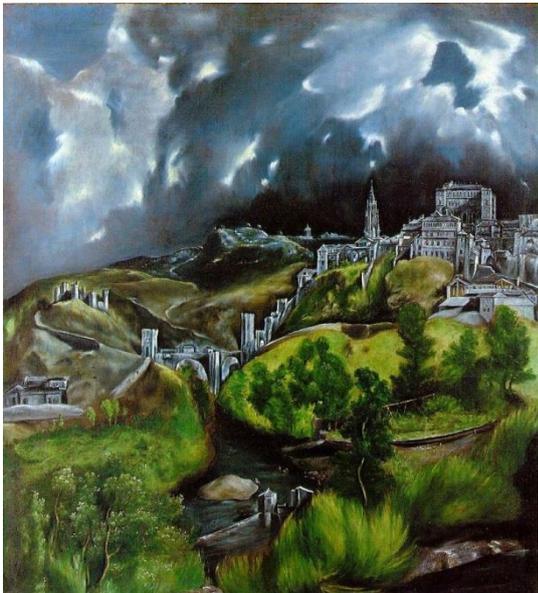
画家の描いた世界遺産 ～ エル・グレコの描いた『歴史都市トレド』

トレドには、仕事やプライベートで何度か訪れたことがあります。

いずれもマドリードからのバス移動でしたが、大型の観光バスは旧市街に入れないので、橋の外で下車し、ガイドさんの誘導で、歩いて旧市街に入ります。トレドの街は、いつも観光客が多く、また路地が入り組んでいるので、迷子にならないように気をつけたいものです。特に、曲がり角が2回続くと、一番後ろの方がいなくなるなんてことがたまにあるので、ご注意ください。

ちなみに、マドリード発着のオプションツアーは半日コース（14:00～18:30）が一般的です。現地滞在は約2時間半。初めて行く方には、ちょうど良いのではないのでしょうか。この街は、訪れる度に観光客が増え、お店も増え、私が最初に訪れた30数年前と比べると、ずいぶんと賑やかになったように感じます。書籍『すべてがわかる世界遺産大事典<下>』の87ページに、トレドの街並みの写真が掲載されていますが、当時の姿を思い起こされて、嬉しいですね。

さて今回は、画家エル・グレコの描いた『歴史都市トレド』について、考察してみたいと思います。エル・グレコは、言わずと知れたスペインの三大画家の一人です。倉敷の大原美術館にある宗教画『受胎告知』が有名ですが、トレドを描いた風景画があることも、ご存じでしょうか。画家が50代半ば、1596年頃（詳細不明）の作品『トレド眺望』です。エル・グレコの絵は、マドリードのプラド美術館に何点か所蔵されていますが、そちらではなく、ニューヨークのメトロポリタン美術館に所蔵されていて、私も1度だけ観たことがあります。



エル・グレコ作『トレド眺望』



『歴史都市トレド』の全景

ところで、皆さんはこの絵を観て、どのように感じられますか。パッと見た瞬間はトレドの街の風景ですが、実際の写真と比較すると、違った印象を受けられるかもしれません。この絵を初めて観た人は、おそらく、「トレドはこんな風景じゃないよ、建物はもっと茶色いんじゃないの……」と思うでしょう。というのも、トレドの風景画（全景）を描こうとすると、画面は、『すべてがわかる世界遺産大事典<下>』の掲載写真のように、建物の部分の面積が多くなり、色彩の主体が茶褐色となるからです。しかしエル・グレコのトレドの絵は、構図も色調もまったく異なります。では、画家は何を表現したかったのでしょうか。

私は、この絵は単なる風景画ではなく、「これから何か起こりそうな、そんな気配を感じさせる絵」だと考えています。嵐の前兆でしょうか、光の中から神がアルカサルに降りてきて、そこから白い稲妻のように斜めに、左下に一直線に降りてくる。またはその逆かもしれません。私は、そんな印象を持ちました。

まず、この絵の構図を見ると、空と大地が建物で斜めにほぼ一直線で分断されています。そして、大地の緑を大きく描き、アルカサルを遠く、右上部に小さく描くことにより、「遠近感」を出しています。次に色調を見ると、空は群青色、大地の濃い緑の中間を灰色の建物が突っ切っていて、まさに閃光のようです。この灰色が強いコントラストとなって、空と大地を見事に分け、双方の色を際立たせる役目をしています。他の色で、この役目は務まりません。さらに緑の大地に目を向けると、草木を少し風になびかせることにより、空に合わせて大地にも「動き」を持たせています。

世間では「エル・グレコは絵が下手だ」と批評する人もいます。しかしどうでしょう。エル・グレコが、構図の取り方も色彩の表現方法もよく理解している画家であることは、この絵を観れば、おわかりいただけると思います。また、この絵の中には「人物」が描かれていません。風景画の中に人を登場させると、そこに生活感が生まれ、鑑賞者は親しみを感じ、ほっとするものです。しかしエル・グレコは、それを排除し、逆の効果をもたらしています。

この絵が表現したいのは、既に起きたことではなく、また、今起きていることでもない。これから何かが起こるかもしれない、そういったことを予感させる“メッセージ性の強い絵”だと感じられます。エル・グレコがこの絵で何を伝えたかったのか、何を感じ取ってほしかったのか、具体的な記述も見つかっていないので、それは本人でないとわかりませんが、この絵は単なるトレドを描いた風景画ではないことは確かです。画家の真意をつかむには、この絵を描いた当時の画家の置かれた境遇や心境を知る必要があります。

クレタ島出身のエル・グレコは、そもそもスペイン人ではありません。同じくスペインの三大画家と称されるスペイン出身のディエゴ・ベラスケスやフランシスコ・デ・ゴヤは、宮廷画家となった言わばエリート。対してエル・グレコは、ミケランジェロを批判してローマを追放され、マドリードでは宮廷画家の夢破れて、トレドに流れついたような画家です。当時のスペインでは殆ど評価されず、画家としては不遇な人生だったかもしれません。



エル・グレコの自画像

当時は皆、アカデミックな宮廷画家を目指す時代で、自分の道を貫く画家は異端視されるだけでした。そのような時代に、宗教画でも肖像画でも風景画でも、どんな題材であろうと独自の画風を貫き通したエル・グレコに、物凄く強い信念を感じます。トレドの景観の絵は、怒りの表れか、不気味だ……感じ方は色々あるでしょう。虐げられた画家の「反骨精神」とでも、言うのでしょうか。そういったものが画家の根底にあると思います。

時代に翻弄されながらも、自身の画風を貫き通す——、これが画家の美德というものです。20世紀になって、その生き様と画風が、斬新さを好むピカソを筆頭に、後世の画家らを魅了し、現代に蘇ったことにも、頷けます。

不遇な生涯を送った画家が、没後に評価されることはよくあります。そういった画家たちは共通して、“自分の画風を貫く強い信念”を持っています。その意味で、エル・グレコは本物の画家であったと、私は思います。

沼田政弘